

# 漁村集落における生活行為と集落空間の利用

—宮城県女川町竹浦集落を事例として—

The Living Activity and Use of Space in Fishing Village  
—The Case of Takenoura Village in Onagawa City Miyagi Pref—

住居学科 羽島 愛奈 葉袋 奈美子  
Dept. of Housing and Architecture Akina Hashima Namiko Minai

**抄 録** 漁村集落における生活では、集落空間と生活行為が密接に関係している。本稿では、女川町竹浦集落を対象にしたヒアリング調査の結果をもとに、漁村集落における生活行為と集落空間構成との関係を空間的な視点から考察した。結果として、集落住民は、海と山に挟まれた僅かな平地である集落空間を、様々な生活行為に対応させて効率よく利用し、文化と習慣を継承しながら生活してきた様子が確認できた。また海の恵みを生活の中うまく取り入れる空間利用状況が見られた。東日本大震災の復興まちづくりにおいても、従来の生活と集落空間への配慮が重要であることを再確認した。

**キーワード**：漁村集落, 生活空間, 住宅, コミュニティ

**Abstract** There is a close relationship between village space and living activity in the life of a fishing village. This paper survey investigates this relationship based on a survey taken by residents in Takenoura fishing village, Onagawa city, Miyagi Pref. We found that people use small spaces which are surrounded by nature efficiently and have inherited culture and customs. It is important to consider about traditional ways of living and village space when thinking of reconstruction from the Great East Japan Earthquake.

**Keywords** : fishing village, living space, housing, community

## 1. はじめに

### 1.1. 研究の背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災によって、東北地方の太平洋沿岸は津波により甚大な被害を受けた。三陸地方には小規模な漁村集落が点在し、それぞれがまとまりのあるコミュニティを維持しながら海の暮らしを続けてきた。それらの集落は海と山に囲まれた高低差の大きい土地に形成され、僅かな平地にひしめきあうように住まいをつくっていたため、津波によって集落全体がさらわれてしまった。

三陸地方の漁村集落の生活を、地域空間的な視点から詳細に明らかにした研究はこれまでも少なく、震災復興のためにも詳しく調査をする必要があ

る。漁村集落における生活においては、一般的な都市での生活と空間利用や生活時間が大きく異なる。被災地の復興を考える上で、私たちが漁村集落の暮らしの詳細を理解することが第一歩である。それなしでは現地の住民たちにとって住みよい暮らしが失われてしまいかねない。現在発表されている各被災自治体の復興プランでは、防災集団移転促進事業による高台移転を中心に検討されているが、復興後も震災前から集落で継続されてきた豊かな海の生活文化を継続できるのか疑問である。

本稿の目的は、宮城県女川町竹浦集落を事例として、失われた三陸地方の漁村集落の生活を記録として残し、その特徴的な空間と生活の実態を住居学の視点をもって明らかにすることである。

## 1.2. 研究方法

女川町竹浦集落の被災前と被災後の状況と地形を把握するため、日本地理学会の津波被災マップとゼンリン住宅地図、国土地理院発行の2,500分の1の地図を用いた。被災前の集落での生活の様子を調査への同意を得られた集落住民にインタビュー調査を行った。2012年7/2, 8/7～8/8, 10/15～10/19, 11/18～11/21に竹浦集落の住民26名に対してヒアリング調査や残存する建物跡地の実測等を行った。文献については、女川町誌や宮城県図書館みやぎ資料室所蔵の郷土資料を用いて調査と分析を行った。

## 1.3. 研究対象地概要

女川町は宮城県の東部、牡鹿半島の基部に位置し、リアス式海岸によって日本有数の良港を有する町である。沿岸漁業と養殖漁業が盛んであり、年間を通して様々な魚種が水揚げされる。また、東北電力の女川原子力発電所を有するが、2013年9月現在においても再稼働の予定はない。離半島部には小規模な漁村集落が点在しており、中心部には石浜、小乗浜、その南に位置する五部浦には高白浜、横浦、大石原、野々浜、飯子浜、塚浜、小屋取の7つの集落が、北に位置する北浦には指ヶ浜、御前浜、尾浦、竹浦、桐ヶ崎の5つの集落が存在する。また、離島である出島と江島にも集落が存在する。

図1に集落の位置を示す。竹浦集落は、女川町の中心から東に約4kmのところに位置する、人口145人57世帯(平成24年度女川町役場町民課調べ)の漁村集落である。住民の30%が漁業を生業としており、ギンザケやカキ、ホヤ、ホタテの養殖が盛

んである。集落は図2に示すように3つのグループに分かれており、それぞれ大きい浜、小さい浜、だいわんという名がある。大きい浜と小さい浜は集落形成の初期から存在するが、だいわんは人口増加に伴って新たに開拓されたため、比較的新しい家や分家が多い。

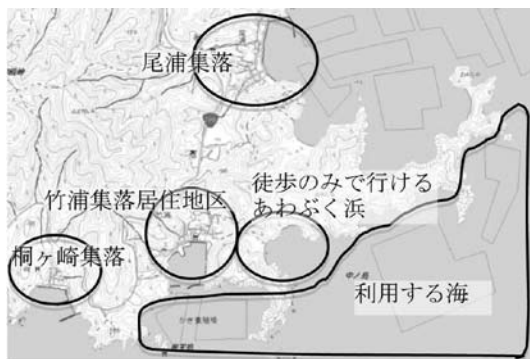
東日本大震災による大津波で、集落に存在した住宅をはじめとする建築物はほとんど流出し、竹浦集落は壊滅的な被害を受けた。現在竹浦集落に残って暮らすのは1世帯のみであり、他の住民は女川町内や石巻市、仙台市、もしくは県外の仮設住宅で避難生活を送っている。漁業は少しずつ復興しており、納屋や支部会館など失われた作業場や集会所の機能を果たす役割としてプレハブの番屋が建てられている。復興会議や漁業にかんする作業等は、番屋で行われている。

## 2. 居住空間の特徴

### 2.1. 屋号から読み解く集落の歴史

竹浦集落には同姓が多く、阿部・鈴木の姓が住民の大半を占めている。そのため、屋号を用いてその家の呼び名としている。表1に各家の屋号の由来を分類した。屋号の由来には旧家や分家、日照の特徴、地形的特徴、昔の当主の名、井戸の有無などがあり、屋号は昔の生活や地形を読み解くきっかけとなる。

大きい浜の旧家である御前の家と小さい浜の旧家である庄屋は別名「神主家」と呼ばれ、それぞれの浜のまとめ役を務めていた。小さい浜の古い旧家である井戸端は家の近くに大きな井戸があり、まだ水道が通らなかった時代に井戸を開放し、住民の抛り



注：国土地理院電子国土 Web システムより作成  
 図1 竹浦集落周辺の地理



注：日本地理学会 津波被災マップより作成  
 図2 竹浦集落内の地区名

表1 竹浦集落の屋号と由来

	屋号あり					屋号なし (商号)
	旧家	分家	日照	地形	その他	
大きい浜	御前の家	神の家 西の家 東の家 新家	カバフト サガレン 満州 奉天	坂の家 田中 畑中 ハマネ ウエニイ カワムゲ	キダハン タナコ インチョネ キジッショヤ	マルトヨ マルフク マルタ ヤマボシイチ マルキユウ
小さい浜	庄屋 井戸端 トンシヨ	新家		下手 山根 ムゲネ ヤマコ	新家 天理教 母屋 新船 イモヤ チョッコラヤ 酒屋	マルコウ
だいわん		シンヤ		オシャガタ タップチ		マルフジ マルム マルユウ カネカ

所となっていた。トンシヨと呼ばれる家は代々民生委員など、住民の世話役を務めており、その音からは役人の駐在所である「屯所」を想像させる。日照に関する屋号としては、カバフト（樺太）、サガレン（サハリン）、満州など外国の地名と思われるものがあるが、集落の中でも日当たりが悪く寒い場所であることを示している。地形に関するものには田中（田の中にある）、タップチ（田のふち）カワムゲ（川向いにある）等があり、護岸工事などによって変化する前の地形や土地利用について知ることができる。

## 2.2. 住宅の特徴

図3は高台にあったために、集落の伝統的な住居形態の中で、唯一津波を逃れた住宅である。隣町である雄勝名産の雄勝瓦で葺いた屋根が特徴的である。玄関には破風を構え、やや武家的な性格も持ち合わせている。壁は上部が漆喰塗であり、下部には焼杉板の下見板張りとなっている。道路に向けた縁側は掃出し窓が並び、写真の住宅右側の台所と見られる部分は、屋根の形態や外壁素材の違いから後に増築したと考えられる。集落の他の住宅の平面図から推測すると、この住宅は図4のような間取りであると考えられる。縁側が南側にあり、東に位置する海を向いてはいない。しかし、台所は東を向いているため、台所に立つと海が見えると考えられる。住民へのヒアリング調査でも夕飯の準備をしながら漁

船が港に帰ってくる様子を見ていたという女性は多かった。納屋は図中着色してあるが、3棟ある。前面には畑があり、作物を育てていた様子がうかがえた。納屋は漁具用と畑作業用等と用途によって使い分けられていると考えられる。また、住居の前庭が開けているので、縁側から人の雰囲気や、道を通る車など周囲の様子が感じられる。

この間取りは、東北の民家に多く見られるものであるが、図5に示すようにほぼ全ての住宅に海を向いた縁側があり、釣り具の手入れや作成、干物干し等を行う作業場となっていた。漁村らしい特徴である縁側は開放的な空間で道路に面するものが多い。周囲から作業の様子が見え、路地から声をかけたり挨拶をしたりとコミュニケーションをとるきっかけとなる空間であった。オカミの大きな神棚には氏神や海の神々が祀られた。外の流しや井戸は魚の処理に利用された。玄関前の階段に座って海を見ながら話をしたり、道行く住民に声をかけてお茶に誘ったりと住まいの内と外とのつながりが非常に強い。

## 2.3. 納屋の重要性

漁業を生業としている、もしくは過去にしていた家は納屋を所有している。調査から確認できた竹浦の住宅74棟に対して、納屋は104棟あり、複数の納屋を所有する世帯があることが分かる。多くは住宅敷地内に建てられているが、養殖業を営む世帯で



図3 竹浦集落に残る伝統的住居

は、大がかりな仕掛けを海に運ぶ利便性を考えて、海岸近くに納屋を持つ者もある。また、納屋を住宅に直結させて増築している例も見られた。

納屋は漁業に使用する道具や、魚を保存するための大きな冷蔵庫であるストッカーが収納されており、物置に似た役目を果たしている。内部には水道を引いて水を使う作業もできるようにしている世帯や、畳の部屋を設けて離れ等の居室のように使用している例もあった。単なる物置や漁業の作業場ではなく、状況に応じて多様に形を変え、使われていた様子がうかがえる。集落の人々にとって納屋は生活に不可欠で、非常に重要な空間となっていた。

### 3. 行為別にみる漁村の空間利用

#### 3.1. 漁業

調査を行った世帯の漁業種は、養殖、沿岸、遠洋、その他（釣り船等）の順に多かった。中には遠洋と沿岸、遠洋と養殖、というように何種類かを兼ねて漁業を行っている世帯も見られ、漁業種の組み合わせによって生活スタイルにも多様な変化が見られた。養殖漁業者は、養殖業を中心として漁をしているが、養殖の作業のない日やシーズン外は沿岸に出て「魚釣り」と呼ばれる沿岸漁業を行い、魚や海藻を収穫する。また、高齢の漁業者や女性の1人世帯等が養殖業だけを行っている例も見られた。集落の若い人々の力を借りながら、上手に海とつき合っていることが分かる。年代を超えて助け合う集落全

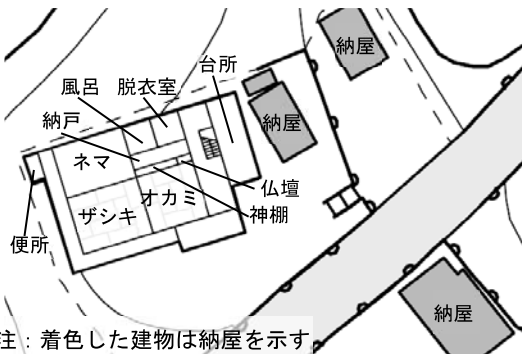


図4 竹浦集落の伝統的住居の推定間取り図

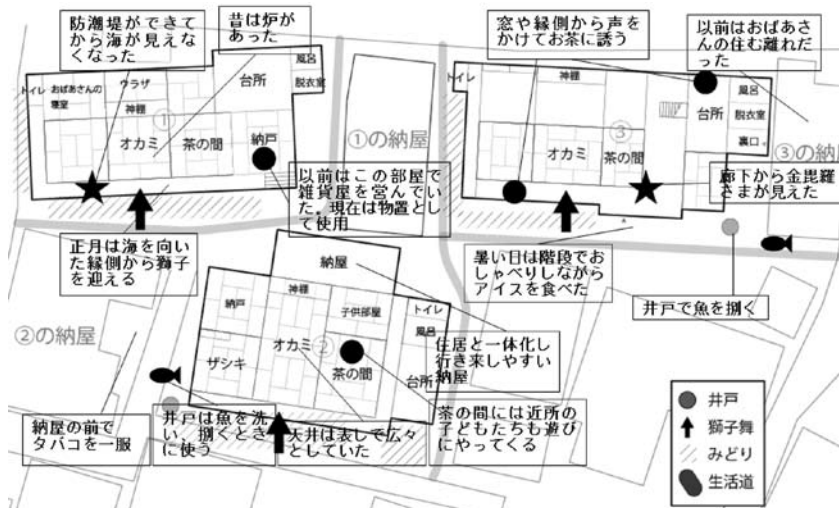


図5 竹浦集落中心部の住居の間取りと生活行為

体の綿密なコミュニティがうかがえる。

漁業の重要な作業として釣り具づくりがある。漁の種類によって様々な釣り具を使い分けており、その大きさや必要とする道具によって作業をする場所が異なる。養殖等で使用する大規模な仕掛けは海岸や庭、漁協の支部会館など広い共同スペースを使って複数人で協力して作業を行う。釣りや個人が沿岸漁業等で使う小規模な仕掛けは、漁業者それぞれが納屋や自宅等で作業し、休日やちょっとした空き時間につくっておく。生魚を使う仕掛けは、漁に出る前日につくり、納屋のストッカーや冷蔵庫に保管しておく。釣りたい魚によってエサになる魚が異なるため、エサ用の魚を釣りに行くこともある。住宅内には気軽に作業ができるような縁側のような空間が必要であることが分かる。納屋と住宅との往復も非常に頻繁であるため、徒歩で気軽に行ける距離にあることが望ましい。

### 3.2. 魚をさばく場所

図6の印は集落の中でヒアリングからわかった屋外で魚を捌く場所を示している。魚をさばく際に利用する場所は自宅近くの水場が最も多かった。気軽にアクセスできることと、捌くために使う道具が近くにある為であると考えられる。漁師は漁から帰宅する直前に、自宅で食べる分を海岸で捌くこともある。海水で洗ってその場でウロコや内臓をおとす。海岸にそのまま放置しても海鳥が食べてくれるからである。台所でさばいた場合も、内臓や骨を海まで捨てに行く。女性が家庭で調理をする際には、井戸



図6 竹浦集落内で魚をさばく場所（だいわんを除く）

を含む外の水場や納屋で処理することが多い。

魚介類は種類によって捌き方も様々である。ホヤは海水で洗う必要があるため海岸で捌く。竹浦ではカキ処理場の近くの平場がホヤをむく場所として使われていた。ウニは自宅の台所で捌くことが多い。また、アナゴ等の長いものや大きな魚類は普通のまな板では置くことができないため、専用の道具を使い、頭を釘で押さええて一気に捌く。このように、使用する道具も魚種によって異なる。自宅近くで捌くのは、納屋や台所が近く、道具を取りに行くのが容易であるからという理由も考えられる。

魚を捌く行為は場所が限定されているのではなく、その時々で集落内の場所を使い分けていることが分かった。中でも、庭先の井戸や流し、納屋の水場等は使用される頻度が高く、必要不可欠な設備であるといえる。

### 3.3. 住民の集まる場所

図7の印は集落の中で住民の集まる場所を示している。小さい浜と大きい浜に集中しており、だいわんには見られなかった。集会所や漁協の支部会館、かきむき小屋や商店等の公共性の高い空間は小さい浜と大きい浜の海岸近くにつくられたためであると考えられる。

竹浦では「人の家の玄関が自分の家の玄関である」ということわざがある。各家が非常に開放的であり、毎日朝早くから誰かしらお茶に訪れるというほど行き来が頻繁である。日頃からお茶のみ（竹浦



図7 竹浦集落内で人の集う場所（だいわんを除く）

では「お茶っこ（オチャッコ）」という)をするのは、高齢者であるが、その家族とも必然的に顔を合わせることとなり、結果的に多世代間での交流が生まれている。単身で暮らす高齢者にとって、このような交流が見守りの目となっていると言える。

### 3.4. 海を見る場所

図8の印は集落住民が海を見る場所を示している。海の近くに住む集落住民は常に海の様子を気にかけて生活している。海を見る場所のほとんどが自宅内部か自宅近くの道路や庭であることが分かった。ほとんど全ての家から海を臨むことができ、内部からは見えなくても少し外に出れば見ることのできる環境であった。集落の地形は傾斜が大きいため、海から離れたところに位置する住宅からも海が見える。海を見るのは浜に下りていくときだけではなく、天気や波の様子を判断する以外にも、何気なく海を見るのが日常生活において当たり前であり、精神的な安心感にもつながっている。

現在、住民の多くは仮設住宅での暮らしを強いられており、震災前のように気軽に海を見る事が出来ない状況だ。仮設暮らしでの難点に「海が見えない、海が遠くなった」と答える人が多かった。移転計画においては、海が近くに見える土地を選択することが、集落での暮らしを継承するひとつの大きな要素であるといえる。

### 3.5. こどもの遊び場

図9は集落内の主なこどもの遊び場を示してい

る。大きい浜と小さい浜の海岸付近に集中しているが、海岸から離れた山でも遊びを行っていることが分かる。小規模で平地の少ない集落では、海岸はもちろん、堤防や電信柱、畑、山、路地、全てが子どもたちの遊びの場になっていた。海岸では釣りや、貝とり、防潮堤をつたって行く散歩、水泳、船遊び等漁村集落であるからこそ遊びが行われている。ゲートボール場では日常的に球技が行われていたほか、お盆には集落の盆踊りが行われた。自宅の畑の裏山や、神社の山のふもと等に自分だけのひみつ基地を持っていたという人もいた。おにごっこや怪獣ごっこなどもここで行われたという。集落の中の路地空間も、遊びの空間とされており、斜面を自転車で下ったり、冬にはスキーやそり遊びをしたりしていた。集落の子どもの数は年々減少しており、学年関係なく皆で遊ぶことが多かった。獅子振りの練習で毎週顔を合わせていたこともあり、お互いに面倒を見合うことが習慣化していた。

### 3.6. 農作業

図10は集落内の主要な畑を示している。竹浦集落には自分たちが食べる程度の野菜を作る小さな畑を有する世帯が多い。自宅の庭の一角や、山沿いに畑を設けている。田を持ち、米作りをしている世帯は見られなかった。ヒアリングの中では、不漁の年に食いつなぐ手段として高台に果物畑を作ったが、上手いかなかったなどという。試行錯誤をして半農半漁の生活を営んできた様子が見られた。



図8 竹浦住民が海を眺める場所（だいわんを除く）



図9 竹浦集落内の子どもの外遊び空間



図10 竹浦集落の農地

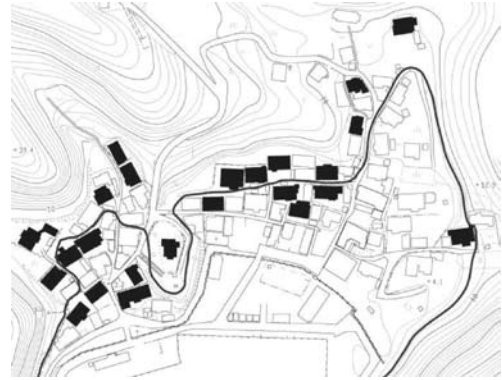


図11 昭和三陸大津波の浸水ラインと旧家の位置

## 4. 歴史の継承

### 4.1. 集落行事

漁村集落での暮らしは厳しい自然と対峙しながらのものである。竹浦の住民は昔から深く神仏を信仰していた。住民提供資料には、以前は年末年始に24もの行事があったことが記載されていた。現代では殆どの行事が行われなくなったが、正月用の松の切り出し等各家庭の中で守られ、継承されているものもある。集落全体としては毎年1/2～1/3日に行われる春祈禱が最大の行事である。

春祈禱は集落全世帯が参加する祭典であり、2日間かけて獅子が各世帯を訪ね歩く。神社を出発し、大きい浜と小さい浜の神主家で獅子振りを行い、その後各家を訪問する。ルートは2つあり、年ごとに交換している。獅子と笛太鼓が縁側からオカミに入って舞を披露する。以前は獅子振りに参加できるのは男性のみであったが、竹浦では30年程前から女性も獅子振りに参加できるようになった。小学生になると毎週土曜日の夕方に集会所に集まり、獅子振りの練習をする。獅子振り保存会や漁協実業団のメンバーが指導する異世代交流の場でもある。

女川町では各浜が獅子頭を持ち、正月に獅子舞をする風習がある。獅子頭は各浜ごとに異なる顔をしており、住民は自分たちの集落の獅子頭に強い愛着と誇りを持っている。獅子頭は今も集落にとって、住民をつなぐ重要な存在である。

### 4.2. 立地と災害の影響

女川町誌によると、これまでに記録されている地震や津波等の災害は計23回であった。地震災害や

それに伴う津波災害が多く、過去の災害として記録されている全てが津波による災害であった。町誌から確認できる記録から単純計算すると、約47年に1度の頻度で津波被害に見舞われている。東日本大震災以前の大津波としては明治三陸大津波、チリ沖地震津波、昭和三陸大津波などが挙げられる。図11は比較的旧家とこれらの津波の凡その津波の到達ラインを示した集落の地図である。集落の旧家は大きい浜と小さい浜のある高さ以上に集中して立地していることが分かる。小さな津波では被害を受けず、大津波が来ても、浸水程度の被害で済むようなある程度の高台である。一方でだいわんは居住スペースの最も奥まで津波が到達し、被害も大きかった。このことから、旧家の先祖は度重なる津波被害を受ける度に移転等何らかの対策を行い、その結果今回の震災においても被害を最小限にとどめたと考えられる。このような記録を世代を超えて継承することが防災上非常に有効である。

神社は大きい浜と小さい浜の間の高台に位置し、浸水や倒壊などの建物被害は無かった。竹浦集落の神社に上る長い階段には、昭和三陸大津波後に作られた石碑があった。年月が経って忘れられ、元の設置場所から移動されていたが、元の設置場所が今回の津波の到達高さに一致していた。日常的に目に入る場所にこのような石碑を設置してあったことは先人からの知恵であることも改めて確認できる。

## 5. まとめ

図12は3章で述べた行為を1枚にまとめた集落地図である。作業や使用する道具の多い漁業を生業としているために、平地の少ない集落の各空間を工

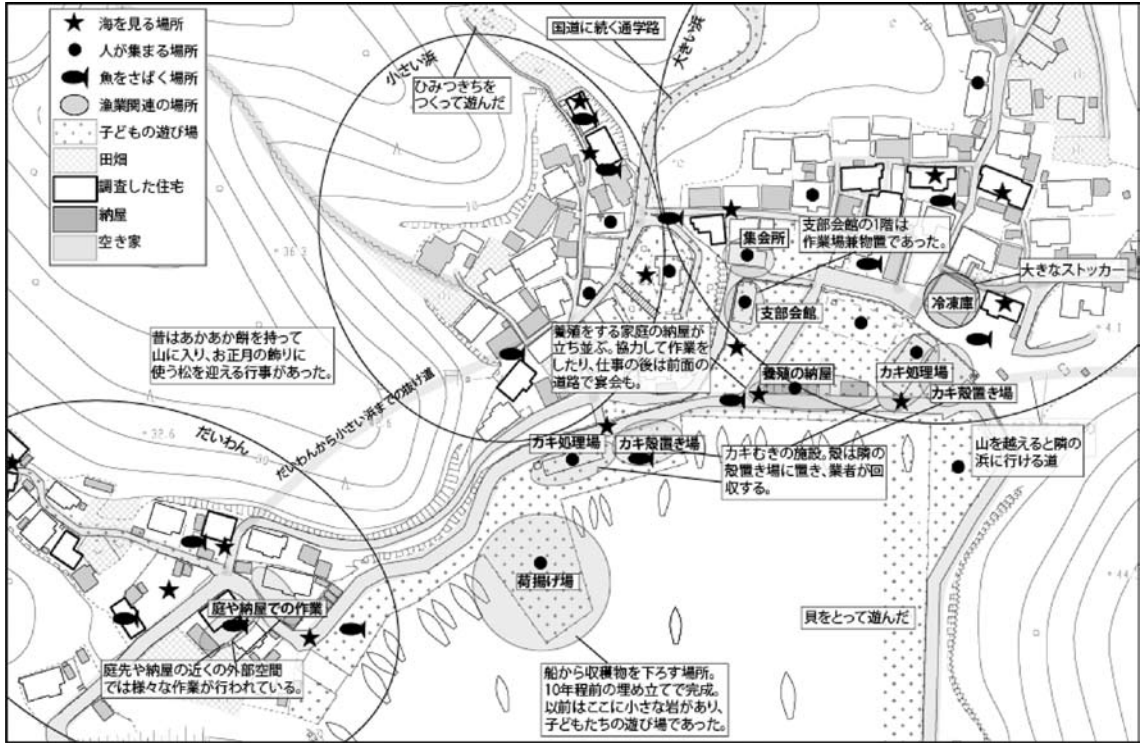


図 12 竹浦集落内の生活空間利用

夫して利用していた様子が分かる。漁村集落の生活は人と人、人と海の距離が物理的にも心理的にも非常に近い。人々は生活の中で互いに助け合い、家と海を頻繁に往復しながら生活してきた。集落住民にとって住居は自らの住宅だけでなく、海を含めた集落全体としてとらえられている。移転により海から離れては、今まで当たり前であった漁村での生活が変わってしまう。漁業も畑作業も不便を強いられることになる。海と生活が離れることによって様々な作業に支障が出るのが予想される。

三陸の漁村集落には、明治三陸大津波で被災し高台に移転したが、不便に耐えかねて低地に戻り、昭和三陸大津波の際に再び大きな被害を受けた集落がある。記憶の希薄化により、徐々に高台から低地に移住したためである。このような悲劇を繰り返すことのないように、記憶の継承と生活に不便の無い集落空間の復興が求められる。高台移転は時間も費用も莫大にかかるが、果たして集落の魅力ある生活を継承できる最前の方法だろうか。今回の震災復興まちづくりにおいては、各漁村集落空間の詳細と生活

を丁寧に見直す必要がある。

### 参考文献

- 1) 宮城県女川町役場：女川町誌（1960）
- 2) 女川町：女川町誌続編（1991）
- 3) 政岡伸洋，鈴木卓也，小谷竜介：波伝谷の民俗—宮城県南三陸沿岸の村落における暮らしの諸相—，東北歴史博物館，宮城（2008）
- 4) 吉川正展：宮城県女川町における漁村集落群の再形成に関する研究，大阪大学工学部地球総合工学科建築工学科目キャンパス・地域デザイン研究室（2012）
- 5) 木多道宏：総括：地域文脈の継承に向けたガイドラインの提言，大阪大学，日本建築学会都市計画委員会地域文脈形成・計画史小委員会（2012）
- 6) 宮城県公式ウェブサイト（<http://www.pref.miyagi.jp/>）平成 25 年 9 月現在
- 7) 女川町 HP（<http://www.town.onagawa.miyagi.jp/>）平成 25 年 9 月